
書 評

The Augustinian Tradition
edited by Gareth B. Matthews
(Philosophical Traditions, No.8)

University of California Press, Berkeley/Los Angeles/London, 1999, pp. xvii+398

荻野弘之

本書は、アウグスティヌスの思想形成のモメントを探る（編者のいう backward-looking）研究ではなく、哲学、文学、神学、政治などを横断する多様な局面でアウグスティヌスがどう読まれてきたのかを考える（forward looking）英語論文集である。全20編のうち5編は既刊（いずれも80年代後半以降）の論文の（改訂）再録であり、残りが書き下ろし。冒頭の「序説」では編者が収録論文を10行以内で短評し、各論文の内容や意図を要約して全体への眺望を与えてくれる。個々の論文の手法、文体、水準はかなりばらつきがあるものの、本書を通覧することで、問題別と時代別の二つの座標軸に沿ってアウグスティヌスの影響作用史が見て取れるし、最近刊行された Elenore Stump and Norman Kretzmann eds., *The Cambridge Companion to Augustine* (2001) と併読すると、ここ十数年の英語圏におけるアウグスティヌス研究の水準と関心の所在が見渡せる格好の論文集である。読者各自の関心に応じて拾い読みしてもよい。いずれにせよ、広義のキリスト教思想史におけるその深甚な影響を改めて確認し「同時代人」としてのアウグスティヌスを発見できると共に、「アウグスティヌス主義」をめぐる従来の定説に少なからず修正を迫る意味をもっている。

巻頭論文 Alvin Plantinga (Notre Dame Univ.), *Augustinian Christian Philosophy* は20世紀後半の知的状況をふまえて、キリスト教信仰と哲学、神学の三者の関係を改めて正面から問い直す。それは1930年代の「キリスト教哲学」論争を強く意識してい

るが、ジルソンらがトミズムを基軸に「信仰と理性の調和」を図ったのに対して、プランティンガは（神学と諸学を截然と区別した）トマス型とは全く違う（哲学と神学が縫目なく接続する）アウグスティヌス型を提示することによってポストモダンの「キリスト教哲学」を構想する（p.21-23）。現代思想の人名録を並べた叙述は大風呂敷でいささか冗漫な感は否めないが、中世哲学研究が潜在的には常に曝されている問題であり、近年の学会シンポジウム「中世哲学と現代」とも重なる問題をいくつも共有している。

続く Frederick Crosson (Notre Dame Univ.), *Structure and Meaning in St. Augustine's Confessions* と Genevieve Lloyd (Univ. of New South Wales in Sidney), *Augustine and the "Problem" of Time* とは、いずれも『告白』に即した問題を扱う。60年代のマルーに代表される文学的研究は『告白』を「自伝文学」として読むことから、全巻の統一性が問題とされたが（p.29）クロッソンは「自伝」としての見方を中和し、第十巻において具体的な人名と事件が一切言及されていない点を手掛かりに、全体を「神の語りかけをいかに聴き取るか」という視点から統合的に見ようとする。他方ロイドは「時間論」を第11巻の行文からのみ問題にするのではなく、友の死（IV.8.13）母の死（IX.12.31）という二つの事件に遭遇した際の「二重の悲哀」を物語る回想の心理機構に注目し、リクール『時間と物語』を援用しつつ「現在の優位とは、意識の自己現前性の脱構築でもある」としてデリダの著名な「現前の形而上学」の批判に応えようとする（p.59）。こうした物語論や読書論を随所に織り込む手法は Brian Stock, *Augustine the Reader* (Harvard UP, 1996) とも通じる最近の新しい『告白』の読解の傾向であろう。

ルソーの『告白』は近代的な自我意識を綴った啓蒙主義文学の代表であるが、Ann Hartle (Emory Univ.), *Augustine and Rousseau: Narrative and Self-Knowledge in the Two Confessions* はルソーがアウグスティヌスを強く意識し、いわばそれに応答するために書かれたと考える。ルソーにとって「内なる自己」は彼を見据える神の視線にほかならず、「創造的な記憶」によってその「内なる自己」に接触しようとする点において、近代的な自我意識とアウグスティヌスの自己探究との異同を浮かび上がらせようとする。

そうした近代の劈頭に立つデカルトのコギトがアウグスティヌスのコギトと似ていることは、すでにメルセンヌやアルノーなど同時代人も気づいていた。しかも心身二

元論を支える「各自の精神は、自己（精神）が何であるかを単に自己を知ることによってだけ知る」という定式は、それゆえにまた「他者の心」という困難を不可避に招来する。Gareth Matthews (Univ. of Massachusetts at Amherst), Augustine and Descartes on Mind and Bodies はウィトゲンシュタインやマルコムによる批判が、実はデカルト以上に深くアウグスティヌスに照準を定められるべきことを明らかにする。

周知のようにウィトゲンシュタインは『哲学探究』の冒頭でアウグスティヌスを引用し、その言語像を批判したように見える。だがその引用を含む文脈が「創造的に隠匿」されていることは必ずしも周知ではないと、Myles Burnyeat (All Souls at Oxford), Wittgenstein and Augustine De magistro は鋭く指摘する。『教師論』の記号による学習の問題は、最後に記号によって伝達されない次元へと踏込むが、照明説が示しているのは、しばしば誤解されてきたように、感覚的な表象をそのまま知識の場面に持ち込むことではない。真理とは個々の断片的な知識ではなく、全体としての理解を与えるような光なのである (p.299)。これはアウグスティヌスがプラトンをごくわずかの、しかもプロティノスの著作という間接的な媒体によりながらも、実に正確に問題の本質を洞察していたことを示している。この論考はプラトンやアリストテレスにおいて「理解」という全体性として「知識」を理解しようとする著者の知識論を、プラトニズムの末裔のうちに変奏を聞くことによって、新たに補強する意味をもって

さて内面性の発見は、当然のことながら罪と意志の問題を軸にして倫理に関しても新生面を開拓することになる。原罪や夢を論じた論文と並んで、Christopher Kirwan (Exeter at Oxford), Avoiding Sin : Augustine against Consequentialism は功利主義とも密接に関連する「結果主義」の問題を扱っている。いずれを選択しても悪行に加担せざるをえない状況の中で人はいかに振舞うべきか。同意なしになされることは行為ではないとすれば、最善の結果を求める際に、あくまで自己が悪行の主体にならないことが重要な条件となる。だが『嘘について』の中で、より大きな悪を避けるために嘘をつく（偶像に香を焚く）ことを是認したアウグスティヌスの立場は、キリストの裁判で手を洗ったピラトの怠慢を責める『マタイ福音書講解』と較べて、やや微妙なものがある。いずれにせよ、アウグスティヌスは行為における主体性と受動性の相克を比類なく洞察していたのである。

こうした倫理的行為の受動性と表裏をなす形で、愛の受動性を問題にした Martha Nussbaum (Univ. of Chicago), Augustine and Dante on the Ascent of Love はキリスト教化したプラトン主義的愛の理念をめぐるダンテとの比較を試みた本書中の白眉と言えよう。ダンテと中世哲学の関係についてはジルソンの先駆的な研究があるが、ナスバウムはエロスの情熱とキリスト教の純潔の理念がいかにか折合うのかを、両者のテキストを対比しつつ丹念に追跡する。プラトン主義の強い影響下にある初期作品『魂の偉大』には人間の魂が7段階の階梯によって次第に上昇していく図式が描かれている。だが『シンプリキアヌス宛諸問題集』(396年)において、こうした究極の目標は現世においては達成不可能であり、また過去の記憶と習慣という事実的肉体的条件を備えた人間にとって望みえない境地であることが強調される。自力救済から恩寵の待望への変化である。論文の後半では『神曲』地獄篇のパオロとフランチェスカの物語と、ダンテがベアトリーチェから唯一回名前を呼びかけられる煉獄篇第30歌をもとに、愛する主体の傷つきやすさ、愛の無条件性などの理念がダンテにあって、次第に美しい詩的表象に転位してくる様が魅力的に描かれている。

もっともアンセルムスにあっては、アウグスティヌス『三位一体論』から範型、愛、工作者としての神の理念が継承される一方で、聖書にもとづく諸々の表象が、次第により主知主義的な愛の説明へと昇華していく方向も認められるのである (Marilyn Adams (Yale Divinity School), *Romancing the Good : God and the Self according to St. Anselm of Canterbury*).

正戦論の問題は、2001年9月の「同時多発テロ事件」以来再び脚光を浴びることになった。キリスト教のうちには平和主義の伝統も強力であるが、正戦論を主唱する源泉がアウグスティヌスにあることは常識であった。しかし Robert Holmes (Univ. of Rochester), *St. Augustine and the Just War Theory* はこうした伝承が実は中世(トマスなど)を通じて強化されてきたと断じ、アウグスティヌス本来の議論の文脈に戻そうと試みる。その際、あくまで彼の「内面主義」を見落としてはならない。アウグスティヌスにとって戦争は重要な関心事であり続けた。しかしそれは通常の政治思想的な理念とはいささか色合いを異にする「地上の国」に住むキリスト者の自己規定に関わる問題だったのである。

以上、論文集の中から特に書評子の関心を惹いたものを中心に紹介したが、この他にも中世思想における意志の概念の登場、原罪を論じたもの、ロック、カント、ジョ

ナサン・エドワーズ、ジョン・アップダイクとの比較など、魅力的な論稿が多い。さて本書を読んで痛感するのは、近現代哲学、教義神学、文学、政治思想史などを巻き込んで展開されているアウグスティヌス研究の裾野の広がりや学問的な交流のあり方である。たしかにわが国でも、教文館の『著作集』や創文社から刊行された一連のモノグラフなどを中心に、教父研究誌『パトリスティカ』（新世社）や『中世思想原典集成』シリーズ（平凡社）も加えて、すでに相当の蓄積をみている。しかし中世哲学会を含むアウグスティヌス研究が、他の分野の研究者と交流し刺戟し合う場面はまだ数少ないのではないかと、やがては日本語でこの種の論文集が刊行されることを、同学に携わる者の念願としたい。

Alexander Knysh

Islamic Mysticism : A Short History

E. J. Brill, 2000, pp. 358

仁子寿晴

同書は Brill の新しいシリーズ Themes in Islamic Studies の第一巻である。このシリーズはイスラーム研究における各分野の概説が目的とされており、刊行予定の幾冊かは同社の *Encyclopaedia of Islam* からの抜粋になるようだ。この書は Knysh のオリジナルな著作であるが、使用した *Encyclopaedia of Islam* の項目が巻頭に記してあり、どのような著作であれ、できる限り *Encyclopaedia of Islam* に依拠させることが編集方針のようだ。この書は原典への参照がなく、不満を感じさせるが、著者の責任ではないのであろう。Knysh が原典を読み込んで記述したと思われる重要な指摘も見受けられるが、原典にさかのぼって確認することができないのが残念であり、以降に刊行されるものでは少しでもその編集方針が是正されるべきであろう。しかし近年の *Encyclopaedia of Islam* の項目は研究成果の蓄積などによりかなり充実した内容を持っているので、それがまとめられるということは有益ではある。

イスラーム神秘主義 (taṣawwuf) の分野では数多くの概説書がすでに存在する。代表的なものを拾ってみると、古くは Arberry (*Sufism An Account of the Mystics*